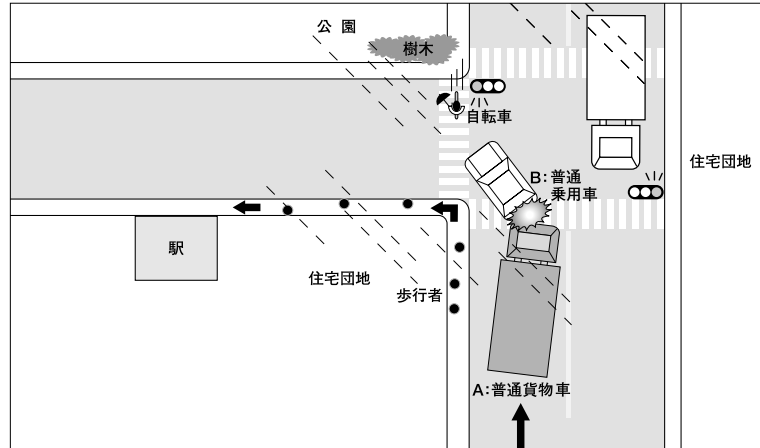


職場における交通安全指導

交差点を直進する際、急停止した前車に追突



■事故の概要

- 発生日時
日 時：平成21年12月某日 午前6時頃
天 候：雨
- 道路状況
片側1車線の市道交差点
- 事故の当事者
運転者A（普通貨物車）：24歳、男性
被害者B（普通乗用車）：58歳、男性
- 被害状況
A：前部バンパー左側中破
B：頸椎捻挫、全身打撲（全治1か月）

事故状況

Aは入社後3か月。これまで運送業での乗務経験がなかったことから、1か月間、ベテラン運転者による同乗指導を受け、現在は2t車を運転し、主に大型店へ食料品を搬送している。

明るく活発な人柄であるが、時々運転に荒さが見えたことから、同乗指導者から指摘されたこともあった。

当日は、年末の繁忙期でしかも週末であり多忙な業務スケジュールが組まれていたため、未明に会社を出発し、荷物を積み込むため近くの倉庫へ向かう途中であった。

昨夜来の雨が降る中、住宅街の片側一車線道路を走行中であったが、辺りはまだ暗く、ライトを点け走行している状況であった。

事故発生場所である交差点に近づくにつれ、道路は緩やかな下り勾配となり、自然と加速も加わりスピードオーバーの状態になっていた。

そのうち、前方を走行中のBが運転する乗用車が交差点付近に差し掛かった際、左折の合図を出し左側に寄るのを認めた。

その時Aは、Bと幾分距離をおいて追従し交差点を直進しようとしていたが、他に通行車両が見当たらず、また、数人の歩道通行者を見かけたものの、いつもどおり歩道を通り近くの駅へ向かう人達だろうと考え、Bはスムーズに左折するものと思い込み、減速することなく走行していた。

ところがBは左折を始め横断歩道に差しかかると突然、横断歩道の直前で停止した。

雨で視界が悪く遠方に視線を向け走行中のAは、交差点の近くになって初めてBが停止していることに気づき、慌ててブレーキを掛けたがスリップし、Bの車両に追突し怪我を負わせた。

Bが横断歩道を通過直前に急停止したのは、進路前方にあった公園の薄暗い木立の陰から傘差し自転車が急に横断歩道に進入し、迫って来たためであった。

この事故の原因は、Aが交差点を直進する際、雨で路面が濡れていたにもかかわらず速度を緩めることなく、しかも、視界が悪く遠方へ視線を向け走行中であったため、前車の動静注視を怠ってしまい、Bの急停止に気付くのが遅れたことである。

安全指導

①「危険を予測した運転」の励行

当時は、雨で視界が悪く路面も滑りやすいなど悪条件が重なり、見落としや発見遅れ、スリップ等に起因する事故の危険が予想されたため、運転者としては危険意識を強く持ち、慎重な運転を心掛けるべきでした。

しかし、当時のAは多忙な業務スケジュールが念頭にあり、気忙しさから急ぎの心理に陥り、また、いつも通り慣れた近くの倉庫へ向かうという油断から、警戒心も疎かになっていました。

事故の危険性が多く潜在する状況の中、スピードオーバー状態で走行していたことを考えますと、Aの運転は無謀であったと言わざるを得ません。

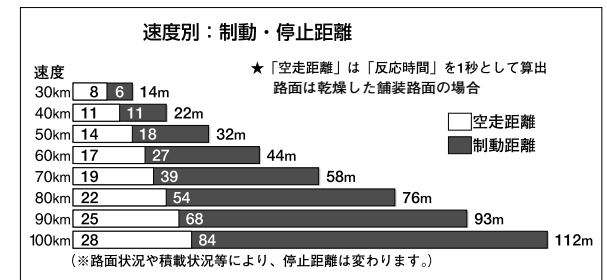
運転に悪条件が重なった時は、いつもより速度を控え、車間距離を十分に取って急ブレーキを回避できるような注意深い、慎重な運転を行わなければなりません。

運転者にとって「当たり前」のことですが、それをごく「当たり前」に行うことが重要で、職業運転者が「プロ」と言われる所以も、その実践にかかっていると考えます。

若い運転者は、運動能力や感覚機能は優れていますが、得てしてそれに頼り過ぎ、冷静な状況判断ができないまま行動が先走り、運転に慎重さを欠き、事故に繋がるケースも少なくないため注意を要するところです。

Aの場合、普段から「運転に荒っぽさがある」と指摘され指導を受けていましたが、その指導が生かされず、悪い一面が現れてしまいました。

厳しい運転条件の時は、警戒心を旺盛にして一歩先を読み、「危険を予測する運転」を励行し、特に慎重な運転を心掛けましょう。



② 交差点の走行

昨年度、当組合で発生した人身事故の発生件数は460件、そのうち追突事故は218件（47.4%）で、しかも停止中の車両に追突したケースが207件（95%）と大半を占め、その多くが交差点やその

付近で発生しています。

この事例のように、交差点を通行する際はいろいろな危険要因をクリアするため、認知、判断および操作にミスが生じないように、まず速度を控え、視野を広くし、そして「危険は何か、何を見て、どんな運転をすべきか」等、目的意識を持った余裕のある運転が欠かせません。

交差点では、「見えない所にこそ、危険が存在する」という意識を持ち、読みの深い安全確認を徹底しましょう。

③ 思い込みに注意

事故発生場所の交差点は、Aが毎日のように通った慣れた道路であり、当時数人の歩行者が近くの駅へ向かって歩いていましたが、その他に通行者が見当たらない状況から、「横断歩道を渡る人はなく、前車はスムーズに左折できる」と思い込んでしまいました。

周辺は住宅街で、普段は早朝でも通勤者が多いところであり、当時は雨で閑散とした状況であったとしても、思い込みにより安全確認を怠ったことは、軽率な判断であったと言わざるを得ません。

一度思い込んでしまうと、安全確認を怠ってしまうケースが多いことから重大事故につながることもあり、交差点はその危険性が最も高い所です。

運転中にある事象に遭遇した際、その対処の仕方にはいろいろな方法が考えられますが、思い込みや勘などにより決め付けることは禁物です。何より自分の目で確かめ、判断することが肝要です。

車の運転は、運転ミスが生じてもやり直しがきかず、後戻りすることができないことを念頭に置き、交通状況を的確に把握し、冷静で慎重な運転を心掛けましょう。

④ 自然加速に注意

事故発生場所は緩やかな下り勾配の道路でしたが、Aは減速を意識することもなく、漫然と自然加速に任せ、スピードオーバーの状態になってしまい、急ブレーキによりスリップさせ事故を引き起こしてしまいました。

運転者に「速度超過の自覚がない」自然加速は、後に判断ミスや運転操作ミスを生む要因となります。

悪天候等の際は、速度の抑制は当然のことながら、急ハンドルや急ブレーキは禁物です。

道路や交通の状況、天候や視界等をよく考え、安全な速度で走行しましょう。